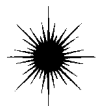


想う人 小川国夫

想
う
人



小
川
国
夫

小
沢
書
店

想う人

昭和五十五年三月二十日印刷
昭和五十五年三月三十日発行

定価一四〇〇円

著者 小川 国夫

発行者 長谷川 郁夫

発行所 小沢書店

東京都千代田区富士見二一五―十二
電話（東京）二六三―九二二八（代）

印刷 精興社

製本 大口製本

製函 日東工業

小川國夫初期習作集

想う人
目次

I

遠い百合

11

II

初冬

45

二月のノ
ー
ト

56

すみ

66

悲しみ

80

洗い場

91

想う人

103

ある日

112

重い航跡

117

III

あわれとあわれみ

149

丹羽正へ——後記に代えて

169

解題

177

函装画

ビエロ・デルラ・フランチェスカ

《ある聖人》より

想 う 人

遠い百合

夢の灰色に對していたことがあつた
地の両極までたゆたい込めるものが
いかなる船出もゆるさない

夕暮――

くるぶしに寄せる、すきとおる褐色の水に
海藻の季節のゆらめきに
黒い船が、重々しく姿をあらわすのを待った
期待の切実のゆえ、得た船に
海が洗う部分も、いつか超え

またたく間を、夕映えの雲と飛び
キラを浮べた、夜の中に流れ込んだ
そして、星の樹海を縫って、
宇宙の薺めく音の中を進んで行った

幾億の輝きをあとにしたことか

銀河のうすれゆく洲に

塩の柱が白光を放ちながら、貫き

阿鼻叫喚さえも、蚊がなくようだった

光は霊を犯して、夜のはじめから

天体の旋る道もない、夜の夜を貫きつづけた

純粹な恐怖——無温の光は

地の被造物に触れては、固く鋭い死の影を引き

赤子のふくむ、女の胸のやわらかささえも、たえがたい
青にすかし、時もなく

ひとりシンシンと立つ原理ではないのか

……もだえにはもだえを

呻きには、容赦なく呻きを加え

血と涙には、かわきを

死には、冷いえみを……

こうした動物も、この孤絶者に匹敵するものではない

……ゼロの闇のかがやき

髪を噛んで死んだものと

はらわたを土にまぶして引きずりつつ

野をさまよい歩いたものとを

冷然と見すかしていた柱

聖人さえも、遙かなげきに手もさしのべず

ただ自失してきいて

真の夜の存在をさとりより為すことはなかったのだ

時が——堰ぎも及ばないすべてを消すなみがしらが進む

ただ、白光の峯は

人の命をつかの間にむかえおくり、むなしい

あるいは苛立つ視線に遠く、時の外にそびえる

……人には

それを知って、かりそめに救う——あの自慰より他に

頼りがあるうか

降る星に、濡れた鱗のいきものをふまえ